

伝産男子。伝産女子。 Vol.9

～京扇子～



京扇子とは？

京都で生まれ、日本文化の風情を代表する扇子です。貴族社会の象徴として平安時代に桧扇として発展しました。室町以降は香道・茶道・舞踊とそれぞれに用いられる扇が作られてきました。13世紀頃には中国へ輸出され、それがヨーロッパへと伝わり西洋風の扇になり、その後日本へ逆輸入されて、現在に至ります。詳しくは伝産協会のHPでも紹介しているので、ご覧ください。



伝産協会内
京扇子 紹介ページ

株式会社山岡白竹堂 佐野 文香 さん 28歳

1993年滋賀県大津市生まれ。
お父様の職業が庭師であったことで、幼い頃より伝統工芸に関心があり、かつ絵を描くことやものづくりが好きだったことから、高校卒業後、TASKへ進学し蒔絵を4年間にわたり専攻する。体験入社時には作業の難しさに直面するも、手仕事に携わりたいという強い思いがあり、2015年に入社。現在6年目。
趣味は美術館巡りと神社巡り。御朱印集め。

株式会社山岡白竹堂 山本 郁 さん 26歳

1995年京都府京都市生まれ。
幼い頃より切り絵に親しみ、ものづくりに興味があり、高校卒業後、TASKへ進学し陶芸を4年間にわたり専攻する。新しい事への挑戦が好きということもあり、陶芸以外も視野に就職活動を行い、白竹堂の体験入社を経て2017年に入社。現在4年目。5人の若手職人の中では最年少ではあるものの、優しい先輩に囲まれ日々技術向上に励んでいる。
趣味は3匹のにゃんこと遊ぶこと。



どんな仕事をしていますか？

扇子作りは分業制で、88もの工程があります。私たちはその中の最後の仕上加工の約10工程(商品によって工程数が異なる)を担当しています。
具体的には、①折り目がついた和紙に仲骨(なかぼね)を差し込む作業、②親骨(おやぼね)とよばれる両側の太い骨を熱して内側に曲げる作業、③最終の整形作業、を行っています。1日に約100本の扇子を加工します。京扇子は多くの職人が携わって完成する工芸品です。商品の中にその手仕事の細やかさが目に見えるところが魅力の一つと思っています。先輩から指導の下でこれからも技術力向上を目指していきます。



仕事を通じてうれしかったことは？

通勤途中に、自分が製作に携わった扇子を使ってくれている方を見かけたときです。ものづくりに携わっている職人の一人として喜びを感じる瞬間だと思います。

日々技術が向上しているのが実感できる点です。仲骨の数が多くなるとそれだけ作業は難しくなりますが、最初は25間だけを扱っていたのを35間、45間とステップアップし、最近では60間も少しだけ携わらせてもらっています。新しい事ができるようになる達成感を味わえることも、ものづくりの世界に携わる職人の醍醐味だと思います。



扇面(せんめん)
短い扇面は短地(たんち)と呼ぶ。

扇骨(せんこつ)
骨すべての総称。
単位は間(けん)。
間数が多いと開きやすい。



扇子の名称について

親骨(おやぼね)
両端の太い扇骨。
国産の竹をデザインによって染めて使用。



要(かなめ)
扇骨を束ね固定する部分。“肝心要(かんじんかなめ)”の言葉の由来。
要(かなめ)が緩くなった場合は、お直しもできるため長く愛用できる。

仲骨(なかぼね) 親骨の間の骨。この扇子は18間扇子。
間数が多い扇子は優しい風を感じることができる。

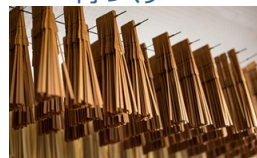
伝産男子。伝産女子。 Vol.9

～京扇子～

京扇子ができるまでの工程

京扇子は分業制、仕上げ以外の工程は京都近郊の産地職人が行っています。

骨づくり



材料は3年～5年の若い竹を使います。薄く細く加工し、親骨には彫り細工や塗工程を施し、要（かなめ）の部分で束ねます。

紙



扇面の紙は、芯紙を表と裏から皮紙で挟んだ3枚合わせのものを使用します。その3枚合わせの紙を扇面型に切り抜きます。

上絵



切り抜いた紙に絵師が1枚1枚上絵を付けていきます。

折加工



上絵の付いた紙を蛇腹状に折っていきます。渋引きをした型紙2枚で紙を上下から挟み、1枚もしくは2枚ずつ折り目をつけ、後の仕上げ工程で骨を差し込む道を通っていきます。

私たち若手職人5名で「ツケ」と呼ばれる仕上げ加工を担当しています

- 折り目をつけた紙の仲骨（なかぼね）が通る部分に息を吹き込み穴を開けます。
- 仲骨（なかぼね）に糊をつけます。ここからスピード勝負になります。
- 折り目の中心に仲骨（なかぼね）をさします。
- 手ぬぐいで押さえて余分な糊をふきとります。
- 扇子1本分がぴたりとはまる台で乾燥させます。代々引き継がれている道具です。
- トンカチでたたいてならします
- 親骨を電熱器で熱します。
- (左)親骨を曲げる前
(右)親骨を曲げた後
- はみ出ている親骨を切ります。
- 親骨と紙を接着させます。



完成

一つ目は、仲骨を紙の折り幅の“中心”に差し込むことです。中心から外れると、扇子をたたむ際にねじれます。竹が柔らかいので注意を払う箇所です。二つ目は、親骨に熱を加えて曲げる加減です。どこから曲げて湾曲の角度をどうするかは職人のさじ加減で決まりますが、この加工によって扇子の閉じを良くする具合が決まります。この親骨の湾曲は昔ながらの日本の涼を取る扇子で受け継がれている形です。



ここがPOINT



ヘンボンデニム扇子セット(岡山)

本藍染扇子セット(徳島)

各産地の職人と京都の扇子職人がお互いの技術を集積して出来た京扇子



山岡白竹堂の魅力とは？

伝統的なところは守っていきながら、時代に合わせた扇子を作り続けています。素材に西陣織、京友禅、黒谷和紙、岡山デニム、本藍染めなどを採用したり、アーティストのツアーグッズとのコラボや将棋棋士の記念扇子の製作も行っています。また、コロナ禍を受けた口元隠しを開発したほか、オーダーメイド扇子も1本から取り扱っています。これらの取組を通じて、幅広い世代の方に使っていただけるように裾野が広がればと考えています。

株式会社山岡白竹堂のHP

山岡白竹堂のInstagram



株式会社山岡白竹堂

【住所】 京都府京都市中京区麩屋町通六角上ル白壁町448番地

【TEL】 075-221-1206 【FAX】 075-221-2759

【代表取締役】 山岡 憲之

【創業】 1718 年 【従業員数】 35名 【会社ホームページ】 <https://www.hakuchikudo.co.jp/>

【会社概要】

享保三年に「金屋孫兵衛」の屋号で西本願寺前に寺院用扇子の店を開業。以降300年以上にわたって職人の手仕事にこだわり日本の涼を受け継いできた。伝統を重んじながらも、時代に合った扇子を考案し京扇子作りの技を生かしつつ、時代のライフスタイルに合った商品を考案し続けている。